

## 平成 19 年度 第 1 回高知県人権教育推進協議会まとめ

日 時：平成 19 年 7 月 17 日（火）  
13 時 30 分～16 時 30 分  
場 所：高知会館 3 階 飛鳥

### 「いじめ問題」について 保育所・幼稚園・学校がどう取り組むか

中学生は子どもの発育の中で自分自身を見失いやすい時期。学校では、自分自身を大事に、友達を大事にしなければならないことを生活面から話をしていく。生徒会など子どもに働きかけ、子どもの提案からも学校をつくっていく。いじめをなくす旬間とか週間を考えてみる方法がある。いじめで子どもを亡くした方など、県外講師の話を各学校で聞かせることのできる予算化をしてほしい。

将来どんな大人になりたいか、どんな生活をしたかという夢を持たせることも必要。目標をつくることによって意欲的になれる場合もある。一番いいのは友達同士のかかわり。ピア・サポーターや生徒会で、どういう学校・友達関係をつくっていきたいか、しんどい思いをしている友達をどうしたらこの仲間で、一緒に活動できるのか考えている。

人を大切にする、思いやりを育てるとするのは、「三つ子の魂百まで」と言われる 0 歳から 3 歳の間が重要。どんなに子どもが育てられてきたのか、どのようにはぐくんでいかなければならないかを保育者と親とが共通理解を持ちながらコミュニケーションを取り合っ、言い合える関係づくりと親がつながる工夫をしてきた。子どもも大人も自分を認めてくれる、かかわりを持ってくれる人がいれば、いじめや人を疎外、排除するような現象は起きない。

子どもたちは自浄能力があり、小さいときにいじめたり、いじめられたり、いろんな経験をしながら大人になっていく部分がある。ただ、今すぐくいじめそのものが陰湿的。いじめられている子どもの保護者もかなりの状況にならないと知らない。いじめている子どもの保護者はうちの子はそんなことはしていないだろうという感覚でいる。親同士のコミュニケーションや、学校との接点をもっと持つことも必要だ。子どもと親が何か一つのこと一緒にできることがあれば、今のいじめの現状は起きない。

人権教育に熱心に取り組んでいる学校ではいじめが非常に少ない。校長先生に人権感覚がしっかりと入っている学校では先生方も育っている。クラスでは、先生が鋭い洞察力を持って子どもの心を毎日見ているから見逃さない。校長先生の人権感覚を分厚いものにしていただくような施策が非常に大切だ。

1 つは、いじめた子どもを指導するとき、大人が悪い子のイメージでいたら絶対その子の心には響かない。やったことは悪い、しかし、その子は悪い子ではない。無意識にされたことを出している。心の奥底にはすごい悲しみを持っている。それがうらやましかったり、腹が立ったりしたときなどにパッと出ている。私たちが背景を分かったうえでかかわっていかないと繰り返す。

もう一つは、いじめられた子どもは、PTSD（心的外傷）を持っている。心の変化はとても時間がかかる。周りが急いで、簡単に「ごめんなさいね」と謝っただけでは表面的な解決で本当の解決にはならない。その辺のデリケートなところを学校の先生方に分かっていたきたい。

いじめたほうの子どもに関しても心のケアが要る。大事にされることでしか人を大事にはできない。

学級の中での取り組み、教育内容というものが一番大切。最低限度のルールが守られていない学級、あるいは親密な人間関係がない学級でいじめが行われている。いじめの傍観者を出さない学級、学校づくりが大切。文部科学省「人権教育の指導方法等の在り方について」を徹底し差別やいじめを変えていく教育をすすめてほしい。

ひとりの子どもの育ちをずっと見つめ続ける人の存在の大きさを感じる。第一に保護者だが、いろんな事情もあり、いろんな人がいろんな角度から見守り続けることが大事だ。ある意味、教師は短い期間で子どもを判断するので、子どもをどう見るかという手がかかるのためにも連携をする必要がある。

すぐに回答を求めたがる択一論の思考があり、何か深く考えるということが苦手になってきている。人間を把握する深い理解ができづらい。Yes かNo というような思考ではない事柄に耐える人間力というものを付けたい。

人権をみんなに問いかける生徒会づくりは、教師の働きかけと意識付けど。風通しのよい職場、教職員が元気で明るい職場環境が大切。担任は学級開きで明確に学級の方針を伝え信頼関係をつくっていく。力で押さえつけると一番弱い子どもにその力はいく。子どもの実態は地域の実態である。だからこそ地域の力を借りて学校を開いてやっている。

校長の姿勢が本当に大事。学校だよりや集会で、いじめや仲間はずれといったことのない、あったかくてお互いの個性を認め合う人権意識の高い学校をみんなで作っていくと、生徒とともに教員にも話をするにより、先生方の日ごろの教育活動にも成果があらわれてくる。

問題が起きた時には、両方が傷つくことのない解決の仕方、対応をする。話しやすい場所を設定し、両方の人権、あるいは気持ちをくんだ指導を教師がする。心のケアを含め長くフォロー、指導・支援というのが必要になる。

車いすの子どもを学校に受け入れたが、自然と周囲の生徒たちが援助をするような形にもなってきた。子どもを受け入れるときに、話を親とか子どもに聞いて、寄り添った形でまずやってみるといことが大事。

取組がすすんだ学校とできていない学校がきっとあるだろう。その理由、原因は何かを明らかにすることが大切だ。先生が忙し過ぎる、人が足りないということであれば、どういう対応ができるのか。学校の中だけでできない、予算としてできないであれば、どこに力を借りるのか。社会教育の現場との連携の可能性も出てくる。

校長次第で学校は良くも悪くもなる。力のある人権感覚のある立派な校長を登用し、学校を統率してもらわなければならない。また、学校が良い方向へ向かい学校全体が生き生きと動く組織づくりも必要。そうした学校づくりをやるようとしている学校を適切にバックアップできる市町村教育委員会、県教育委員会の人権感覚、バックアップ力を付けていかないといけない。

今被害を受けている子どもたちをどう救うかという問題と、長期的に起こらない学校づくりをどうやっていくかの2つを問題意識として強く持っている。いじめの問題が解決できる学校は学力や不登校の問題も解決できる。総合的に学校全体を良くするにはどうしたらよいかを追求していけば、個別の教育課題も解決するという視点で頑張りたい。

## 「不登校問題」について

不登校の原因をはっきりさせるためにもっと詳細なデータがあってもいい。全国集計のデータは、「病気だ」と出さずに逃げることができる。解決に向け、高知市では徹底してそのデータも出している。

田舎の小規模校にも不登校の児童がいる。原因は親の姿勢の問題、子ども同士のいじめの絡んだ関係、そしてクラブ活動の関係などだが、子どもたちの学ぶ権利を奪っていることには違いない。それぞれの立場でかかわるしかない。

子ども的人間関係は、親の人間関係とも似ている。横のつながりのない状態では、いじめや不登校の仲間がいたとしても、相談することもできない。学校側だけでは対応しきれないというSOSをできる限りのところへ訴えることも必要。

今の時代、先生自身も悩み苦しんでいる状況もあるが、子どもにとっては二度とない学校生活で、教師としてのかかわりが大きく影響することを、しっかり押さえていただきたい。学校も、ハード面の環境の変化ではなく人的環境が大事。豊かな先生が豊かな子どもをつくる。人間が一番改善していけるのは人間の気持ち。先生たちの気持ちを支援する体制も必要。

学校現場ですべての人の幸せにつながる福祉教育や人権教育を関連付けて子どもたちに伝えていくカリキュラムを組んでいけたらいい。

今悩んでいる教師をどう支えていくかが、不登校解決の1つではないか。子どもが好きになれなくて悩んでいる教師もいる。また教師は、周りから「ありがとう」と感謝される仕事で、自分がやっていることは正しいことだと思う危険がある。ここに不登校を生み出してしまう原因・要因もある。

奈半利町では通学合宿をすることで不登校を減少させている。子どもが生活を共にするなかで一人一人の活躍の場ができ、お互いに認め合うこともできる。

いつでもどこでもどこからでもやり直せる、学び直せる状況を地域につくる。

子ども達が気軽に相談できる体制が大事である。カウンセラーの先生に来ていただける時間数をもっとほしい。1日の生活の中で一番長い学級が居場所となれるようにしたい。落ち着いて学習するための授業研究や子どもとともにする作業や掃除も大事にしている。

不登校の子どもの親は大変動揺をしている。不登校が出たら世間的に恥ずかしいという感覚を持っている方がいる。長期欠席の手前に、行き渋ったときのかかわり方が大切。「だるい」「しんどい」を遮断せず、「何がしんどいが？」と言えると変わる。待っている間のかかわり方の工夫として、苦労して不登校を脱出した人に出会わせてお話をきくことなどいろんな人と出会わせてあげたらいい。親同士のかかわりが希薄化している。PTAを活用、工夫して親同士のつながりをつくる。地域の先輩とかOBとかを育成して、コーディネーター役になってもらうといい。

人間関係でつまづいている高校生が多い。本音が言えず、さみしがりで、誰かにかかわってもらいたい、気にかけてもらいたいとずっと叫んでいる。

居場所があることがどれだけありがたいことを普段の生活ではなかなか感じる事ができない。不登校の子どもの家族は苦しむ立場にあるので、そのケアを周りがバックアップしていくことが大事。その子が休むべきなのか、押されるべきなのか見極めるのは一人の目でなく、いろんな人に会いながら、いろんな機関と連携して支援体制をつくりたい。

学校や教室などで固定化した人間関係を、大人（教師）が意図的に変化させる、壊す場面をつくるのが大事。大人は言葉には敏感過ぎるぐらいになって子どもたちにはちょうど。言葉が鈍感になってくると、いろんなことに鈍感になってくる。教師や親がいろんな場面で関心を持ち、「え？ それ、どういうこと？」と聞く。うっとうしがっても声を掛ける。常に関心を持っているというアピールを大人はしていく。それが子どもたちにもお互いに関心を持つことの大事さにつながってくる。

たくさんの本と出会い物語を知ることは、自分自身の人生しか生きられない私たちにとって、たくさんの人生を体験することにもつながる。

不登校の数を減らすことが目的となったら怖い。

スクールカウンセラーのかかわる時間がもっている。地域の適応教室で県と市町村のつながりはどうなっているのか。不登校と発達障害が関連する場合もあり適応教室の人を増やしてほしい。教育委員会の教育長や校長先生に知識でなく子ども理解をしてもらい、毎年対応が変わることのないようにしてもらいたい。

一人一人のケースで、今連絡が取れて見守っているのか、それとも取れていないのか、もう全く連絡が取れなくて引きこもっているのかのデータが大事。

保育園、就学前の時期からも不登園はある。性格的に自分を出しきれない子ども、病弱な子ども、家庭の事情などを私たちは丸ごと親も子どもも受け止めながら、安心して、早く保育園へ行きたい、友達と遊びたい、先生と会いたいという環境づくりが大事。

高知市の小中学校は不登校対策を4年間にわたって必死にやっている。その内容を次回お話ししたい。不登校で学校の教育から完全に置き去られる、そのままになるということがないようにしないといけない。

完全な不登校の子どもが5人いたが、ピア・サポートを中心とし、目標に掲げて取り組むことで、全員で卒業式に出席した。子どもたちの受容能力も素晴らしいが、担任のクラス経営、「分かる楽しい授業」も大事。やろうと思えば成果は見える。一緒につくり上げてきたという喜びが子どもたちにもあり、それができる学校もある。

単位制高校入試の前期試験では、教科試験をしたくない。実施すれば不登校の子どもは、不利になる。作文と面接で思い、希望を聞いて来る気があれば優先したい。県下の単位制の高校入試はどうあるべきかをじっくり考え、不登校の子たちに門戸を開けなければならない。

不登校、いじめもいかに学校を楽しくするかだ。先生の役割、保護者のネットワーク、家庭の問題、行政の役割もある。2回目からは、これを柱に立て、意見をより具体的に提案できるようにしたい。土佐の教育改革の中で一番先に、学力を上げるのもいいが、不登校のない、いじめのない日本一、これが土佐の教育改革の最大の柱ではないかと十何年前に申し上げた。これが1つの教育の原点だと思う。その辺について次回から2回協議をしますので、ご協力をお願いしたい。